

ヒブワクチン Q&A

ヒブ(ヘモフィルス・インフルエンザ菌 b 型)について

Q1. ヒブとはなんですか？

ヒブとは、「インフルエンザ菌 b 型」という細菌の略称で、冬に流行するインフルエンザ（流行性感冒）の原因である「インフルエンザウイルス」と名前は似ていますが、まったく別のものです。ヒブによる細菌性髄膜炎は、5歳未満の乳幼児にかかりやすく、特に0～1歳の乳幼児はかかりやすいので注意が必要です。

Q2. ヒブと細菌性髄膜炎の関係は？

日本では年間約600人の乳幼児が重いヒブ感染由来の細菌性髄膜炎にかかっています。

ヒブ(ヘモフィルス・インフルエンザ菌 b 型)がのどから入り、脳を包む髄膜(ずいまく)、のどの奥の喉頭蓋(こうとうがい)、肺などに炎症を起こします。病気の始まりはかぜなどと区別がつきにくく、血液検査でもあまり変化が出ません。このため診断が遅くなりがちです。その後、けいれんや意識障害が出てきます。また、抗菌薬が効かない耐性菌も多く、治療は困難です。亡くなる子どもは5～10%おり、脳の後遺症が約30%に残ります。髄膜炎による後遺症として、発達・知能・運動障害などの他、難聴(聴力障害)が起こることがあります。

ヒブワクチンについて

Q3. 効果と安全性は？

ヒブワクチンは、世界の100カ国以上の国で接種が行われており、細菌性髄膜炎などの侵襲性ヒブ感染症に対する高い予防効果が期待できます。このワクチンは、製造の初期段階に、ウシの成分(フランス産ウシの肝臓および肺由来成分、ヨーロッパ産ウシの乳由来成分、米国産ウシの血液および心臓由来成分)が使用されていますが、その後の精製工程を経て製品化されています。このワクチンが原因でTSE(伝達性海綿状脳症)かかったという報告は1例もありません。理論上のリスクは否定できないものの、このワクチンを接種した人がTSE(伝達性海綿状脳症)にかかる可能性はほとんどないと考えられます。

Q4. 接種スケジュールは？

接種開始の年齢	初回	追加	接種回数
生後2か月～6か月に開始	4～8週の間隔で3回接種	3回目から7～13か月後に接種	4回
生後7か月～11か月に開始	4～8週の間隔で2回接種	2回目から7～13か月後に接種	3回
1歳～4歳に開始	1回のみ【5歳未満に接種】		1回

Q5. 接種後の副反応は？

国内臨床実験での副反応出現率は61.0%であり、その主なものは、発赤(赤み)44.2%、腫脹(腫れ)18.7%、硬結(しこり)17.8%、不機嫌14.7%等でした。その他全身反応として、発熱、せき、鼻水等が5%未満あります。なお、海外の報告から、重大な副反応として、ショック、アナフィラキシー様症状(じんましん、呼吸困難、血管浮腫、顔面浮腫等)、けいれん(熱性けいれん含む)、血小板減少性紫斑病が非常に稀にあります。

小児用肺炎球菌ワクチン Q&A

肺炎球菌について

Q1. 肺炎球菌とはなんですか？

肺炎球菌は、まわりを莢膜（きょうまく）というかたい殻におおわれた菌で、人間の免疫が攻撃しにくい構造をしています。肺炎球菌はありふれた菌で、子どもの多くが鼻の奥や気道に保菌しています。保菌しているだけならば問題はありませんが、小さな子どもは肺炎球菌に対する抵抗力をもたないため、比較的簡単に肺炎球菌に感染することがあります。

Q2. 肺炎球菌と髄膜炎の関係は？

大人では肺炎球菌が原因で肺炎になることが多いのですが、子ども（特に2歳以下）では、まだ肺炎球菌に対する抵抗力がないため、脳を包む膜にこの菌がつき細菌性髄膜炎などの症状の重い病気を引き起こすことがあります。他にも、菌血症、中耳炎等の病気を引き起こします。

日本では、毎年約200人の子どもが肺炎球菌による細菌性髄膜炎にかかり、そのうちの約30%が命を奪われたり、重い障害を残したりしています。

小児用肺炎球菌ワクチンについて

Q3. 効果と安全性は？

肺炎球菌は、約90種類の血清型があります。このワクチンは、小児の重篤な肺炎球菌感染症の原因菌として頻度の高い13種類の血清型に対して有効です。

現在、世界の100カ国以上で接種されています。アメリカでは、2000年から定期接種が始まり、肺炎球菌由来の細菌性髄膜炎や菌血症を激減したことが報告されています。

Q4. 接種スケジュールは？

接種開始の年齢	初回	追加	接種回数
生後2か月～6か月 に開始	27日(4週)以上の間隔で3回 接種【1歳未満に接種】	3回目から60日以上の間隔で接種 【1歳～1歳3か月の時期に接種】	4回
生後7か月～11か月 に開始	27日(4週)以上の間隔で2回 接種【13か月齢未満に接種】	2回目から60日以上の間隔で接種 【1歳～1歳3か月の時期に接種】	3回
1歳に開始	1回目から60日以上の間隔で 2回目を接種		2回
2歳～4歳に開始	1回のみ【5歳未満に接種】		1回

Q5. 副反応について

国内臨床実験での副反応について主なものは、注射部位の反応として発赤（赤み）84%、腫脹（腫れ）69.7%、疼痛・圧痛 28.2%等でした。全身反応として、発熱 71.3%、易刺激性 45.24%、傾眠状態 52.1%等があります。

なお、重い副反応として、アナフィラキシー様症状（じんましん、呼吸困難、血管浮腫、顔面浮腫等）、けいれん（熱性けいれん含む）、血小板減少性紫斑病が非常に稀にあります。